音楽学部学生の学園生活の意識と余暇活動について

A Study on the Making of Life-Consciousness of the Women Students, Music Majors, and on Their Leisure Activity

長野孝男
滝　省治

諸　言

音楽学部学生の学園生活のすごし方の特徴を解明し、一般教育さらに専門教育のより一層の充実を図ろうとする我々の研究も第3回を向かえた。1回目はアンケート調査による度数と頻度分布とを基にした予備的調査であった[1]。この成果を踏まえ、統制群を置いた第2回調査を実施した。学園生活に関係する入学目的、生活時間、満足度等の質問項目を集め、音楽専攻の女子学生を対象としたものである。調査結果から音楽専攻生の長い練習一学習時間が確認され、加えて短かい余暇時間の実態が分った。また、入学目的として専門性の追求をあげるものが多く、個人の能力を生かす就職を願うといった傾向が認められた[2]。

今回は以上の調査結果の検証を第1課題として男子を含めた新たな統制群を設け前回と同様の質問紙調査を行なった。なお、この調査は大阪教育大学体育学研究室の協力を得て行なわれた。また、第2課題を相愛大学音楽学部学生の余暇生活の考察に置いて、余暇のすごし方、考え方について検討した。

我々をとりまく社会は産業構造の変化、都市化の進展と大きな変動の中にあり、生活の中での大筋活動（Big Muscle Activity）は減少し運動不足に伴なう疾病増加が報告されている。また、社会変化の影響はこれら身体面にとどまらず、青少年の考え方や行動にまで及んでいる。すなわち、現代青年は明朗であり、率直で合理性に富むなどの傾向は評価されるが、自己確立の意欲に乏しいこと、またどちらかといえば孤独的な傾向が強く、広く社会へと開かれた連帯意識につながらない傾向があるといった指摘である[3]。「過去に学校内外で組織的集団に入って活動していた者はその後においても積極的に活動する者が多い。」[3]といわれて、サークル・クラブ活動への参加は集団への強い帰属意識を青年に与え、新たな社会の形成者としての自信と意欲を育てるものと考えられる。余暇活動における組織的活動への参加の重要性が認識されよう。また、この余暇活動については自由時間の増大に伴ない人間にとっての価値が問題

視されるに到った。J. デュマズディエは「余暇とは、個人が職場や家庭、社会から課せられた義務から解放されたときに、休息のため、気晴しのため、あるいは利得とは無関係な知識や能力の養成、自発的な社会参加、自由な創造力発揮のために、まったく随意に行なう活動の総体である。」[4] と述べ、休息・気晴し・自己開発の三つの機能を余暇に置いている。

こうした余暇活動の重要性の認識から、体育、スポーツの研究分野においても、余暇を取り上げた研究は数多くみられる。最近のものでも、余暇活動の人間行動からの分類[5]、余暇欲求と動機との関連[6]、余暇活動と労働との対比[7]、など多様な角度から詳細な研究がなされている。本研究は以上の問題把握のもとに学生の余暇活動に対する考え方を吟味し、日常生活の中の創造的な余暇活動のあり方を検討しようとするものである。

本　　論

前回の調査で我々は音楽学部学生の学園生活に対する意識の諸特徴を見出すことができた。しかし、統制群に短大生を用いたことから、4年制の大学と短大の差を明示したにすぎないのではないかとの疑問が生じた。また、専攻学科が音楽であることから直接、音楽学部学生の特徴と考えたが、専攻科目としての音楽は美術あるいは体育のようないわゆる技能系学科としての特徴を持ち合わせるものと推察される。音楽専攻生の特徴と分析したものは、実は技能系学科の者の持つ特徴であるかもしれない。本調査はこうした疑問を検証すべく、四年制教員養成校を対象校として、国文学科と技能系学科としての統制群に体育学科とを加え再調査を行なった。この検証の後に、相愛大学音楽学部学生の余暇生活の把握をねらいとして以下の二点を目的とした。

I　目　　的

1.　音楽、体育、国文学を専攻する学生を特徴づける、学園生活のすごし方についての要因を解明する。

2.　相愛大学音楽学部学生の余暇活動の実態とその考え方を把握する。

II　研　究　方　法

1　調査期間：昭和58年10月上旬

2　調査対象：大阪教育大学1、2年生（310名）、相愛大学音楽学部1年生（95名）、計385名。

表1　大阪教育大学、調査対象者

専攻課程			1年 男	1年 女	2年 男	2年 女
技能系学科	音楽	小学校	0	12	0	16
		中学校	0	6	0	3
	特設	音楽	0	0	0	1
		声楽	4	6	0	10
		ピアノ	1	9	0	13
		その他	4	6	3	2
	体育	小学校	25	14	23	15
		中学校	8	1	10	0
国語		小学校	7	27	21	27
		中学校	1	13	0	0

表2　相愛、大教大1年生対象者

学校		小学課程	中学課程	音楽学	声楽	ピアノ	その他	計
相愛大音楽科1年	男子	0	0	0	0	1	3	4
	女子	0	0	14	33	31	13	91
	全体	0	0	14	33	32	16	
大教大音楽科1年	男子	0	0	0	4	1	4	9
	女子	36	6	0	6	9	6	63
	全体	36	6	0	10	10	10	

そのうちわけは表1、2の通りである。三専攻別生活意識の比較には表1の大阪教育大学学生を対象者とした。また、余暇活動の分析では表2に示した両大学、音楽専攻の1年生のみを対象とした。

3　調査内容：昭和57年度作成の「学園生活に対する調査」用紙を用いた。入学目的、生活時間、余暇活動等について13の観点から構成されている[2]。

4　結果の整理

①　三専攻別生活意識の比較

音楽、体育、国文科を特徴づける要因把握のため、質的データの判別、予測分析の為の方法論である林の数量化理論第Ⅱ類を用いた[8]。これは「外的基準が分類で与えられる場合の数量

化」[9] であり、本研究では対象者がいずれの学科に属するかの判別を、上述の調査項目の中から55アイテム、計118カテゴリーに数量を与え、個人別合計得点（ケース得点）を算出することから行った。計算は調査項目を内容から2分割して行った。得られた偏相関係数、カテゴリーウエイトを中心に比較検討する。

なお、計算は大阪教育大学天王寺分校、データステーションの TSS 端末から、京都大学大型計算機センターの SPSS プログラム HAYASI 2[10] を起動し行った。

② 余暇活動の分析

上述の調査用紙、余暇関連項目について2次元クロス表を作成して x^2 検定を行った。独立性が棄却された項目については、交互作用の源泉を突きとめるため、対数一線型モデルによる質的データ分析を行った。なお、この計算は同パーソナルコンピュータ用プログラム、LOG2[11] を用いた。

Ⅲ 結果と考察

1 音楽、体育、国文学専攻生の特徴

音楽、体育、国文学の専攻者を判別するのに、学園生活に関する事項、意識項目のうちいかなる要因が専攻の規定因として有効であろうか。音楽、体育、国文学専攻を外的基準とする数量化第Ⅱ類による分析を行なった。

数量化とは各項目要因の各カテゴリーに一定の数量 χ_{jk} を与えることであり、個人の各項目反応パタン $\delta_{i(jk)}$ をもとにした一次の和から個人得点 α_i が得られ、この得点によって外的基準の弁別が行なわれる。数式では以下のように表現される。

$$\alpha_i = \sum_i \sum_k \delta_{i(jk)} \chi_{jk}$$

$$\delta_{i(jk)} \begin{cases} =1 & \text{個人 } i \text{ が } j \text{ 項目 } k \text{ カテゴリーに該当} \\ =0 & \text{そうでないとき} \end{cases}$$

調査項目を、自らの生き方、生活満足度を中心とする意識項目と生活時間、サークル・クラブ活動、余暇活動が含まれる生活項目との二つに分け考察する。

Ⓐ 学園生活に対する意識について

入学目的、現在及び将来の生き方、学園生活の満足度、興味の対象、余暇に対する考え方、体力の有無、スポーツの好嫌についての7項目26要因について検討した。表3は判別結果の精度を表す相関比であり $\eta=1$ のとき判別が完全にできる。2根求まり相関比はいずれも高く、判別精度は満足できるものであった。また図1は専攻科目別に個人得点 α_i の平均を示したものであり第1軸で音楽がプラス、体育がマイナスに位置し、第2軸では音楽・体育群はプラス、国文科はマイナスに位置する。第1軸は音楽、体育の弁別軸であり、第2軸はいわゆる技能系学科群とそれ以外の科目の弁別軸ではないかと推察される。では、とりあげた項目、要因

表3　意識項目についての相関比・寄与率

	第 1 軸	第 2 軸
固有値 (η^2)	0.639	0.504
相関比 (η)	0.799	0.710
寄与率	0.56	0.44

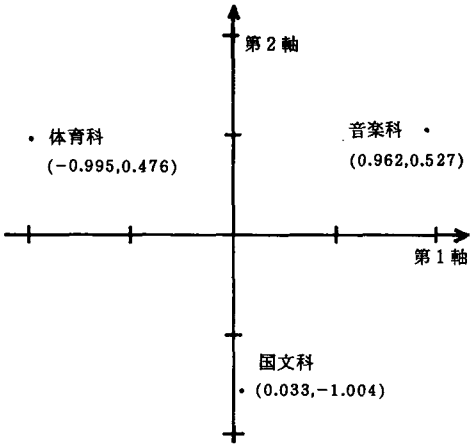

図1　意識項目についての専攻科目別平均値

のうち、弁別寄与率の高いものは何であろうか。「説明特性として用いた個々のアイテムが予測に対してどのくらい寄与しているかなどの尺度として」[8] は偏相関係数を用いることができる。図2は意識項目についての偏相関係数を示したものであり、黒棒は音楽一体育科判別要

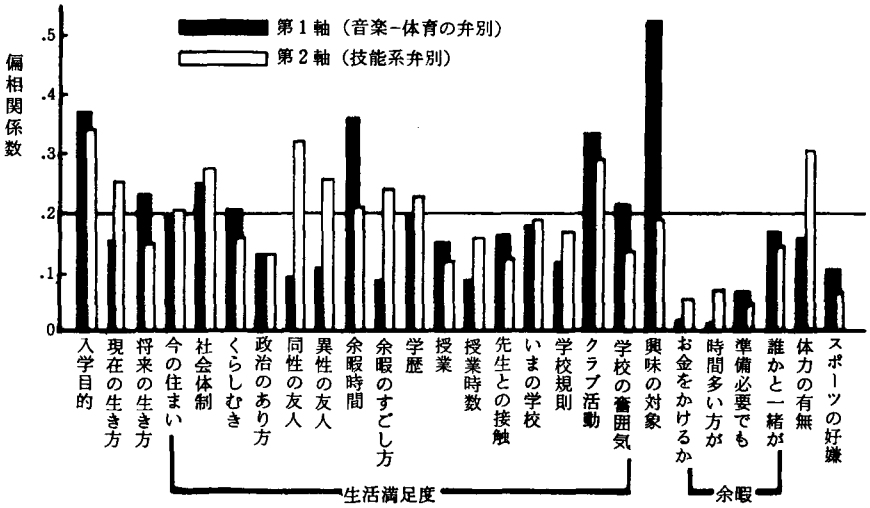

図2　意識項目、各要因の弁別寄与

因、白棒は技能系学科と国文科とを判別する規定要因を示している。第1軸で高い判別力を持つ要因は「興味の対象」、「入学目的」、「余暇時間量の満足度」等で、これらの項目は音楽科一体育科学生の特徴を表わすものと考えられる。また、第2軸には「同性の友人関係の満足度」、「体力の有無」、「現在の生き方」などの項目が寄与率が高く、技能系学科一国文学科学生の特性がこれらの項目カテゴリーに表出されていると考えられる。

表4は第1軸について、表5は第2軸についての数量化の結果であり、寄与率の高いものから並べた。数量化の結果として各カテゴリーに与えられたカテゴリーウエイト、並びに専攻別

表4　意識項目についての数量化第Ⅱ類分析表（第1軸）

項目	カテゴリー	専攻科目別、度数			ウェイト	偏相関
		体育	音楽	国語		
(7) 興味の対象	1. 美や芸術	15	77	36	0.541	0.523
	2. 実際的	40	10	31	−0.316	
	3. 権力	9	1	9	−0.653	
	4. 神秘的	13	3	5	−0.413	
	5. 人に貢献	14	3	6	−0.509	
	6. 知的手段	5	2	9	−0.673	
(1) 入学目的	1. 将来の自立	61	30	71	−0.198	0.365
	2. 教養を磨く	6	6	12	0.156	
	3. だれでも行くから	0	1	1	1.27	
	4. 専門追求	23	57	9	0.388	
	5. 人との触れあい	6	2	3	−0.801	
(5)-7 余暇時間の量の満足度	1. 満足	7	7	15	0.086	0.361
	2. やや満足	6	27	24	0.525	
	3. どちらともいえない	10	16	9	0.144	
	4. やや不満	32	24	30	−0.116	
	5. 不満	41	22	18	−0.336	
(5)-15 クラブ活動への満足度	1. 満足	19	13	21	0.221	0.345
	2. やや満足	30	10	30	−0.281	
	3. どちらともいえない	16	59	30	0.279	
	4. やや不満	25	6	9	−0.448	
	5. 不満	6	8	6	−0.173	
(2)-2 将来の生き方	1. 社会変革（公）	29	24	26	−0.038	0.236
	2. 逃避安逸（私）	18	22	21	0.213	
	3. 現状保持（公）	15	8	11	−0.315	
	4. 生活享受（私）	13	16	24	0.023	
	5. 達観修養（公）	4	1	0	−0.922	
	6. 自己実現（私）	17	25	14	0.074	
(5)-16 学校の雰囲気への満足度	1. 満足	13	6	6	−0.280	0.222
	2. やや満足	27	26	26	0.008	
	3. どちらともいえない	27	18	14	−0.152	
	4. やや不満	19	35	33	0.240	
	5. 不満	10	11	17	−0.148	

注）偏相関数が大きく、弁別力の大きいものの順に項目を配置した。
なお、音楽専攻生は正、体育専攻生は負のウェイトを持つ。

度数を基に専攻学生の特徴をみる。表4から要因カテゴリーの細部を見ていこう。

最も弁別力の大きい興味の対象についての項目では、カテゴリー番号1、「美や芸術に対する興味」がプラスのウエイトを持ち、他はマイナスのウエイトを示した。(＋)ウエイトは音

表5　意識項目についての数量化第Ⅱ類分析表（第2軸）

項目	カテゴリー	専攻科目別、度数			ウェイト	偏相関
		体育	音楽	国語		
(5)-5 同性の友人関係の満足度	1. 満足	44	49	50	−0.013	0.323
	2. やや満足	44	31	32	−0.038	
	3. どちらともいえない	4	11	7	0.638	
	4. やや不満	3	4	7	−0.989	
	5. 不満	1	1	0	2.943	
(12) 体力の有無	1. 体力に自信がある	48	19	16	0.359	0.310
	2. 体力は普通だと思う	42	61	55	0.015	
	3. 体力に不安がある	4	15	24	−0.783	
	4. わからない	2	1	1	0.334	
(5)-2 いまの社会体制の満足度	1. 満足	4	1	1	0.066	0.270
	2. やや満足	10	9	13	−0.161	
	3. どちらともいえない	51	42	31	0.334	
	4. やや不満	19	34	33	−0.141	
	5. 不満	12	10	18	−0.615	
(5)-3 異性の友人関係の満足度	1. 満足	28	23	26	−0.159	0.269
	2. やや満足	28	26	23	−0.083	
	3. どちらともいえない	20	37	31	0.353	
	4. やや不満	16	7	9	0.092	
	5. 不満	4	3	7	0.441	
(4) 現在の生き方	1. 社会変革（公）	14	7	9	0.148	0.257
	2. 逃避安逸（私）	13	22	25	−0.333	
	3. 現状保持（公）	10	9	5	0.532	
	4. 生活享受（私）	23	27	28	−0.011	
	5. 達観修養（公）	3	2	5	−0.836	
	6. 自己実現（私）	33	29	24	0.140	
(5)-8 いまの余暇の過ごし方の満足度	1. 満足	7	13	17	−0.618	0.245
	2. やや満足	19	24	23	−0.078	
	3. どちらともいえない	25	17	11	0.260	
	4. やや不満	31	29	26	0.203	
	5. 不満	14	13	19	−0.069	

体育、音楽専攻生は正、国語科専攻生は負のウェイトを持つ

楽科の特徴（図１参照）であり、音楽科学生に審美型の興味を持つ者が多いことが分る。入学目的では（－）ウエイトが「将来の自立」、「人との触れあい」のカテゴリーにあり、体育科学生はこれらを入学目的とした者が多いことが分る。また、音楽科学生は専門追求を入学目的とする者が多い。余暇時間量では「満足」から「不満」の５段階で反応を求めた。「どちらともいえない」を含め、満足傾向が（＋）、不満傾向が（－）を示し、体育専攻生は音楽専攻生以上に余暇時間量に不満を持っていることが分る。クラブ活動では「どちらともえない」の反応が（＋）で音楽科の特性と出たが、音楽専攻生はクラブ活動参加者が少なく、中間反応が多くなった為と考えられる。将来の生き方項目にはカテゴリー群に特徴的なパターンが見出された。すなわち、音楽科の特徴である（＋）ウエイトは、「なりゆきにまかせ平穏に」、「現状に甘んじ与えられた範囲で生活を楽しむ」、「自分のやりたいことを思いきり楽しむ」といったカテゴリーにみられ、（－）は「よりよい社会の実現」、「いまの社会を大切に守る」、「社会とかかわりを避け修業にはげむ」のカテゴリーに見られた。前者は逃避安逸、生活享受、自己実現、後者は社会変革、現状保持、達観修養とそれぞれ命名されており、私生活中心群と社会志向群とに区別される[12]。将来の生き方に音楽専攻生が私生活中心の生き方、体育専攻生が社会志向の生き方を取る傾向がみられる。

次に、音楽、体育の技能科群と国文科の特徴を示す表５に移ろう。ここで、技能科群は（＋）、国文科は（－）のウエイトを示す（図１参照）。同性の友人に対する満足度では「不満」の回答が国文科にみられず極端なウエイトが与えられた。当然ながら、これを特性とは考え難い。体力については「自信がある」が（＋）、「不安がある」が（－）ウエイトを持ち、技能科学生の方が体力に自信を持つ傾向があることが分る。今の社会体制に対する満足度では、「不満」が（－）、「どちらともいえない」が（＋）を示し、技能群ではやや中間反応が多い傾向がみられる。現在の生き方では「現状保持」が（＋）値を示し、技能科群がやや保守的傾向を持つことが分る。余暇のすごし方では、「満足」の回答が（－）値を持ち、「どちらともいえない」、「やや不満」が（＋）値を持っている。技能群には余暇のすごし方の現状に満足する者が少ないようである。

Ⓑ　学園生活の現状について

図４に示した生活項目、29要因について検討した。表６はその分析精度であり、第１軸の寄与率が63％を示し第１軸による説明分がやや大きい。図３は専攻群別の各軸に対する位置関係を示しているが、図１とほぼ同様である。

表７は音楽―体育科弁別の規定要因を大きなものから順に示しており、（＋）ウエイトは音楽、（－）値は体育の特徴を表す。所属運動クラブについては非常に回答数が多く、多々納ら[13]が作成した運動類型にまとめた。運動類型１～５カテゴリーいずれにおいても、（－）値を示した。（＋）値は運動クラブ所属なしのカテゴリーのみであった。音楽科は運動クラブ所属者が少なく、体育科に多いことを示すにとどまった。学習時間では１時間以下が（－）、他

表6　生活項目についての相関比・寄与率

	第 1 軸	第 2 軸
固有値 (η^2)	0.747	0.436
相関比 (η)	0.864	0.660
寄与率	0.63	0.37

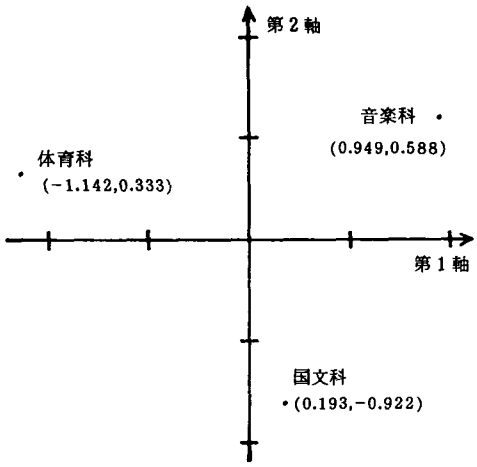

図3　生活項目についての専攻科目別平均値

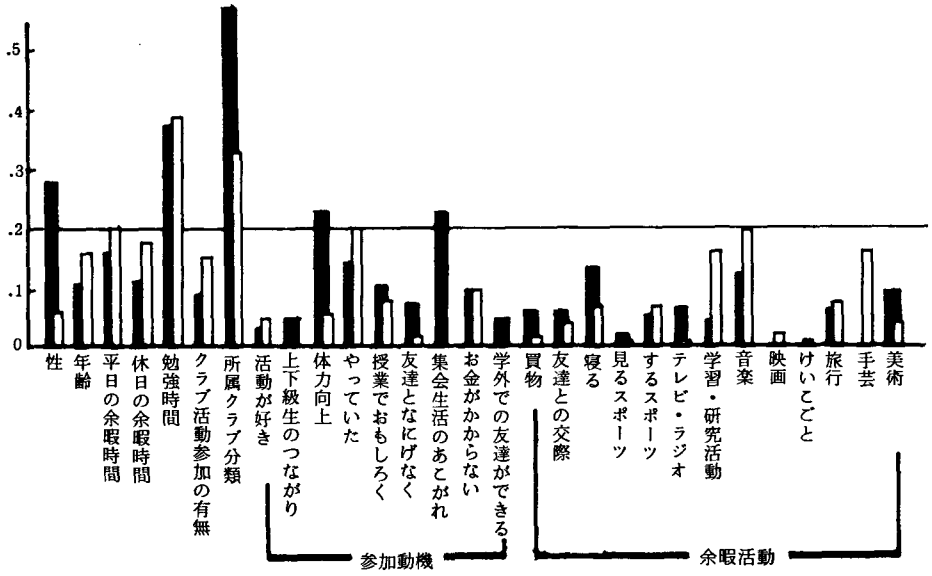

図4　生活項目、各要因の弁別寄与

は（＋）値を示した。音楽科学生に 1時間以下の短かい学習時間を持つ者が少ないことが分る。性別では男が（－）、女が（＋）を示す。これは音楽科に女性が多く、体育科に男性が多いことを示すものである。参加動機項目群に1、2の寄与率の高い項目がみられるが、この群への回答は filter question を設け、クラブ活動経験者に制限しており、数量化適用条件の「唯一の反応が該当する（exclusive な）カテゴリー」とみなせないため省略した。

表7　生活項目についての数量化第Ⅱ類分析表（第1軸）

項　目	カテゴリー	専攻科目別度数			ウェイト	偏相関
		体育	音楽	国語		
(6)-A 所属運動クラブ						0.573
	1. 手軽な運動	3	1	7	−0.090	
	2. 楽しさ、社交(バスケット)	43	8	13	−0.724	
	3. 行事的、野外活動	17	5	6	−0.571	
	4. 男性中心(サッカー)	27	0	3	−0.720	
	5. 武道系種目(柔剣)	6	0	6	−0.120	
	6. 運動クラブ所属なし	0	82	61	0.604	
(4)- 学習時間						
	1. ～1時間	81	22	72	−0.203	0.372
	2. 1時間1分～2時間	7	33	21	0.242	
	3. 2時間1分～3時間	7	24	3	0.312	
	4. 3時間1分～4時間	1	11	0	0.419	
	5. 4時間1分～5時間	0	2	0	0.451	
	6. 5時間1分～	0	4	0	1.056	
性						
	1. 男	66	12	29	−0.302	0.283
	2. 女	30	84	67	0.178	

音楽専攻生は正、体育専攻生は負のウェイトを持つ

表8　生活項目についての数量化第Ⅱ類分析表（第Ⅱ軸）

項　目	カテゴリー	専攻科目別度数			ウェイト	偏相関
		体育	音楽	国語		
(3)-A 平日の余暇時間						
	1. ～2時間	59	39	31	0.143	0.211
	2. 2時間1分～3時間	16	20	20	0.009	
	3. 3時間1分～4時間	13	22	14	0.171	
	4. 4時間1分～5時間	5	4	15	−0.752	
	5. 5時間1分～6時間	2	6	11	−0.335	
	6. 6時間1分～	1	5	5	−0.269	
(3)-B 休日の余暇時間						
	1. ～3時間	16	8	5	0.342	0.182
	2. 3時間1分～5時間	21	25	15	0.180	
	3. 5時間1分～7時間	17	14	10	−0.000	
	4. 7時間1分～9時間	14	13	15	−0.306	
	5. 9時間1分～11時間	17	14	26	−0.255	
	6. 11時間1分～	11	22	25	0.112	

体育、音楽専攻生は正、国語科専攻生は負のウェイトを持つ

表8は技能科と国文科を弁別する第Ⅱ軸に対する要因ウエイトを示し、技能科は（＋）、国文科は（－）値を持つ。余暇時間では平日、休日ともに比較的短時間のカテゴリーが（＋）、

長時間カテゴリーが（－）を示した。技能系学科である音楽科、体育科学生ともに余暇時間が短かいことが特徴であろう。

以上の結果を音楽科の特徴を中心にまとめてみよう。まず性別では女性を多い。時間的には練習時間があり、余暇時間が少ない。これは体育科学生と同様である。そのため、余暇には不満傾向を持つ。運動クラブに入る者は少ないが、国文科と比べると体力に自信を持つ者が多い。また、現状保持の保守的傾向を持つ者が多い点は体育科学生と同様である。入学目的で専門追求、興味の対象には美や芸術を挙げる者が多い。将来的にも私生活中心の生き方をしようとする者が多いのは体育科学生と際立った違いである。

2　相愛大学音楽学部学生の余暇活動とその考え方

現代社会におけるレジャー関心（leisure interest）が個人の知能、洞察力、感受性、審美感、知覚力、知識、知的洗練度、道徳観念などといった個人的背景や個人の趣好や好みなど、いわゆるパーソナリティ要因に非常に影響される[14]ことが分っている。相愛大学音楽学部学生の余暇活動の実態をとらえる前に彼らの興味、現在の生き方について見ておこう。なお、ここでは類似の傾向を示すすものと考え、大阪教育大学音楽科1年生を統制群においた。図5にシュプランガーの6つの価値類型に対する興味の頻度を示した。学校×6類型のクロス表に有意な連関が認められた（$x^2(5)=13.26$、$p<0.01$）。対数一線型モデルによる分析では審美型、経済型を興味の対象とする者が多く（$p<.01$）、社会型は少ないことが分った。また、交互作用効果が審美型興味にみられ、相愛大生が少なく、大阪教育大生に多いことが分る。

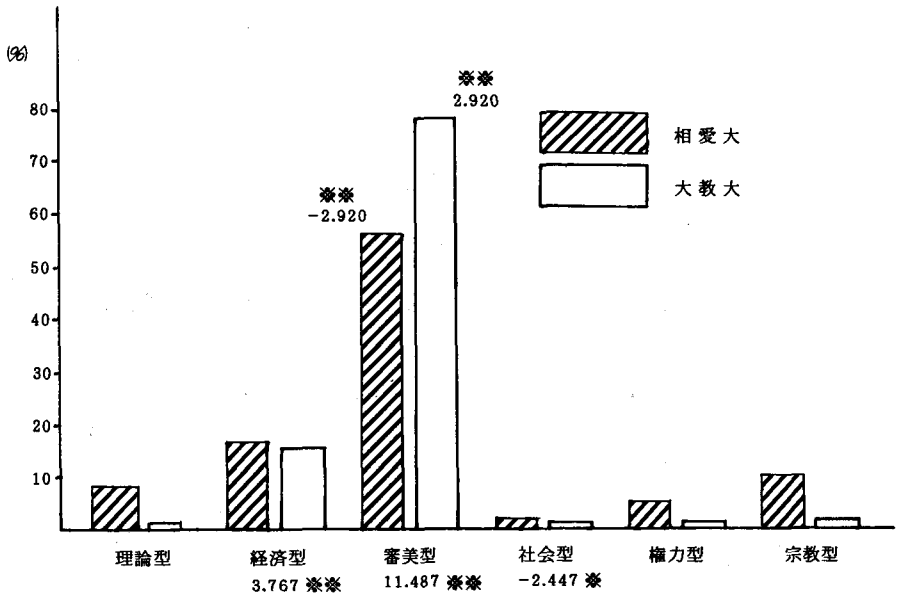

図5　興味の対象（数値は標準化された値を示す　*-1%level、**-5%level）

社会型の興味を持つ者が少ないことは次の現在の生き方においてもみられる。図6がこの関係を示すもので0％の基準線の左が私生活中心、右が社会志向の生き方である。なお、図6では19—22歳青年男女（N＝280、文献(15)データから算出）の結果を統制群に加えた。3×6群のクロス表の独立性の検定（x^2＝28.50、df＝10）では1％水準の有意差がみられたので対数一線型モデルによる分析を行った。表9に分析の対象となるクロス表があり、この結果が表10である。変数1の主効果の差は群間のN数の差を示すにほかならない。変数2では自己実現、生活享受、逃避安逸が多く、現状保持、達観修養の群が少ない（$p<0.01$）ことを示している。現代青年の心理的特徴の一つとし「私生活領域の重視」が指摘されている[15]がこの傾向を示唆するものである。また交互作用効果においては、$\hat{u}_{12(12)}$ がマイナス、$\hat{u}_{12(32)}$ がプラスに有意である。これは現状に甘んじ与えられた生活を楽しむとする生活享受の生き方をとる者が、19—22歳の一般学生に多く、相愛大学生に少ない事を示すものである。又 $\hat{u}_{12(33)}$、$\hat{u}_{12(35)}$ がマイ

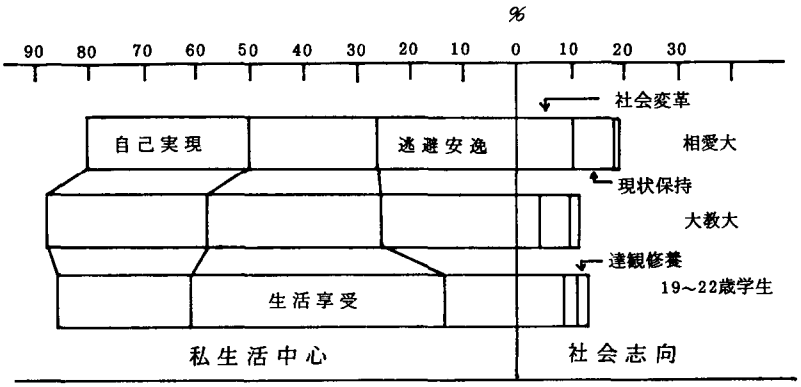

図6　現在の生き方

表9　現在の生き方についての度数

		変数2（U2）					
		1 自己実現	2 生活享受	3 逃避安逸	4 社会変革	5 現状保持	6 達観修養
変数1（U1）	1 相愛大 N＝95	29 (30.5)	23 (24.2)	25 (26.3)	10 (10.5)	7 (7.4)	1 (1.1)
	2 大教大 N＝70	21 (30.0)	23 (32.9)	18 (25.7)	3 (4.3)	4 (5.7)	1 (1.4)
	3 19—22歳学生 N＝280	70 (25.0)	135 (48.2)	38 (13.6)	24 (8.6)	7 (2.5)	6 (2.1)

注）（　　）内は変数1の各群の百分率

表10　対数一線型モデルによる表9の分析結果

ホウワモデル(logF(ij)＝u＋ui(i)＋u2(j)＋u12(ij))　ノアテハメ
カイニジョウ(L)＝0　df＝1　p<1
モデルスイテイユウイスイジュン　z＝1.65　(p<.1)

u1(i)	**p<.01　*p<.05　＋p<.1			
ヘンスウ		コウカ	ゴサ	ヒョウジユンチ
1	u2(1)	−0.185	0.153	−1.207
1	u2(2)	−0.587	0.164	−3.587**
1	u2(3)	0.772	0.120	6.415**

u2(j)	**p<.01　*p<.05　＋p<.1			
ヘンスウ		コウカ	ゴザ	ヒョウジユンチ
2	u2(1)	1.041	0.134	7.775**
2	u2(2)	1.213	0.133	9.098**
2	u2(3)	0.736	0.141	5.231**
2	u2(4)	−0.320	0.214	−1.492
2	u2(5)	−0.754	0.225	−3.355
2	u2(6)	−1.916	0.414	−4.629**

u12(ij)	**p<.01　*p<.05　＋p<.1			
ヘンスウ		コウカ	ゴサ	ヒョウジユンチ
1,2	u12(11)	−0.002	0.195	−0.008
1,2	u12(12)	−0.405	0.200	−2.026*
1,2	u12(13)	0.154	0.203	0.760
1,2	u12(14)	0.294	0.284	1.035
1,2	u12(15)	0.371	0.308	1.205
1,2	u12(16)	−0.413	0.637	−0.648
1,2	u12(21)	0.078	0.211	0.370
1,2	u12(22)	−0.003	0.208	−0.014
1,2	u12(23)	0.228	0.219	1.041
1,2	u12(24)	−0.507	0.369	−1.376
1,2	u12(25)	0.214	0.349	0.612
1,2	u12(26)	−0.010	0.640	−0.016
1,2	u12(31)	−0.077	0.157	−0.486
1,2	u12(32)	0.408	0.152	2.686**
1,2	u12(33)	−0.383	0.171	−2.236*
1,2	u12(34)	0.213	0.243	0.879
1,2	u12(35)	−0.585	0.293	−1.996*
1,2	u12(36)	0.432	0.460	0.919

注）文献 (11) LOG 2 が計算に用いられた。

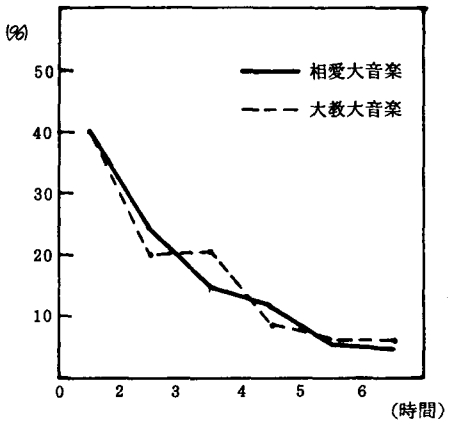

図7　平日の余暇時間

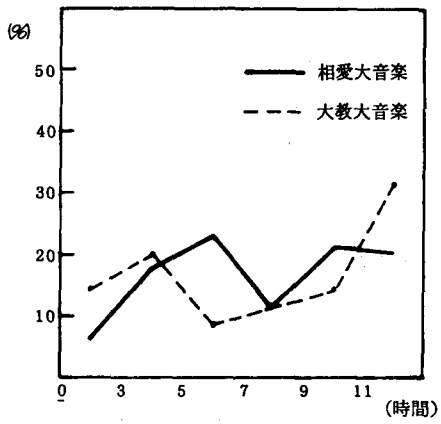

図8　休日の余暇時間

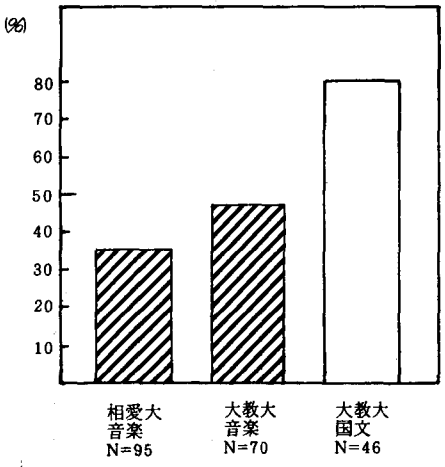

図9　サークル・クラブ活動参加

ナスで有意であった。これは一般学生に逃避安逸、現状保持の生き方をとる者が少ないことを示すものである。音楽専攻生に「なりゆきまかせ平穏に（逃避安逸)」、「いまの社会を大切に(現状保持)」といった生き方をとる者が多い傾向が示唆されよう。

図7、8は平日、休日の余暇時間を示すもので、両大学音楽専攻生に差はみられない。図9ではサークル・クラブ活動参加有無を示しており、音楽専攻生の比較に国文科専攻生を加えた。$x^2=27.79$ で df=2 において1％水準の差が認められた。相愛大音楽専攻生のサークル・クラブ活動への参加が少ないことが理解されよう。

次に現在の余暇に対する満足度を比較しよう。余暇時間量、余暇のすごし方についての満足度を図10に示した。ここで満足度は表11のように満足；＋2から不満足；－2のウエイトを置き度数との積和により求めた指数値である。図10から、音楽専攻生の余暇満足度が、時間、内

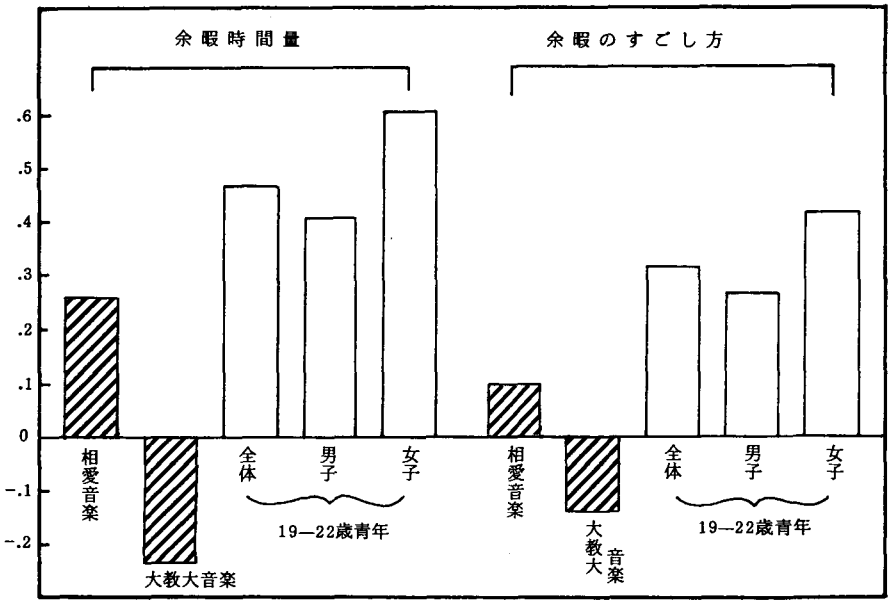

図10 余暇満足度（指数値）

表11 余暇満足度、度数

項目	満足度 ウェイト		満足 +2	やや満足 +1	どちらとも不満 0	やや不満 −1	不満 −2	指数値 (S.D)	N
余暇時間量	相愛大		21	25	17	22	10	0.26(1.316)	95
	大教大		7	19	10	18	16	−0.24(1.336)	70
	19—22歳大学在学青年	全体	—	—	—	—	—	0.47(—)	285
		男子	53	47	41	32	21	0.41(1.329)	194
		女子	—	—	—	—	—	0.61(—)	91
余暇のすごし方	相愛大		13	28	20	23	11	0.10(1.240)	95
	大教大		6	18	14	24	8	−0.14(1.175)	70
	19—22歳大学在学青年	全体	—	—	—	—	—	0.32(—)	285
		男子	34	60	41	37	20	0.27(1.249)	191
		女子	—	—	—	—	—	0.42(—)	91

在学青年のデータは文献(15)、p.62—63、p.101 の表をもとに算出

容ともに低いことが理解できよう。統制群としての一般青年全体の偏差が求まらず、男子19—22歳学生をコントロールとおき、分散分析を行なった。余暇のすごし方では差はみられないものの、時間量には1％水準（F＝6.13、df；358、2）の差が認められている。

最後に余暇の考え方について、4組のポール質問[12] をもとにみていこう。図11がこの結果

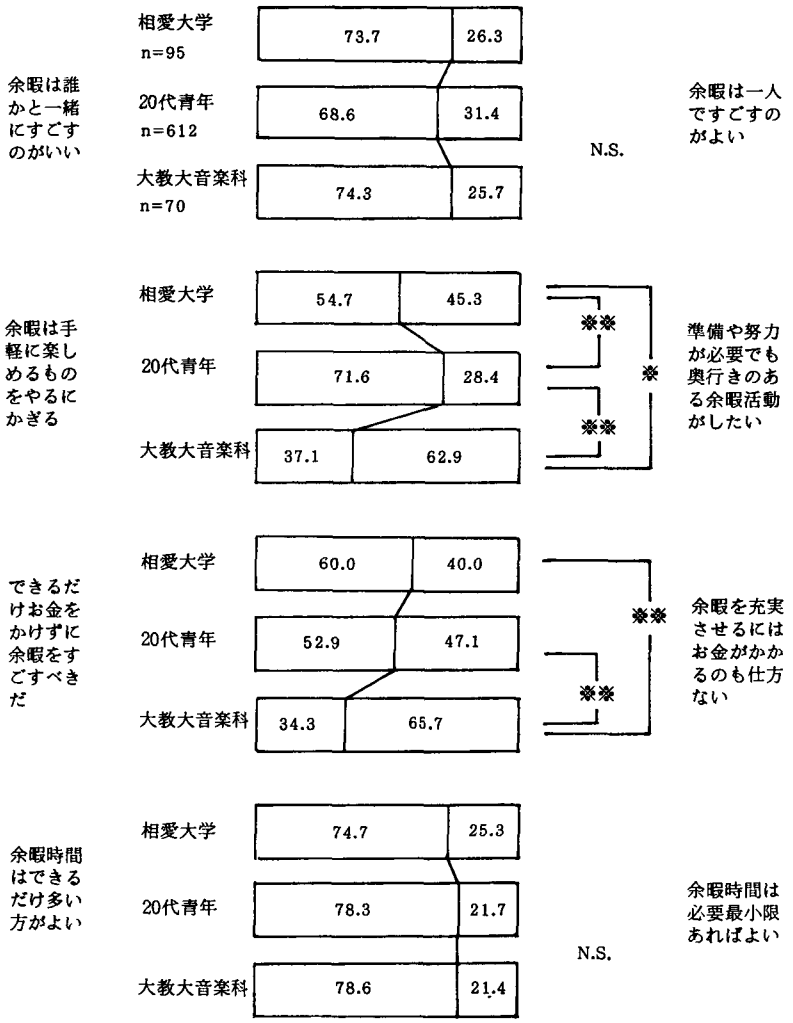

図11　余暇のすごし方　*-5%、**-1% level 有意差、N.S.-Not. Significant

であり20代青年（N=612）をコントロールとした。独立性の検定では、余暇活動の準備の要、不要（x^2=39.98、df=2、p<.01）と出費（x^2=11.45、df=2、p<.01）の項目に有意差が認められ、相互群間の検定を加えた。準備の要・不要の項目では、音楽専攻生は一般青年に比べ「奥行きのある活動をしたい」と回答する者が多い。しかし両大学間では相愛大学生が「手軽に楽しめるもの」を求める傾向があることが分る。余暇活動の出費に関しては相愛大生は一般青年に比べても「お金をかけず」にと考える者が多いこと、また大阪教育大学生がお金がかかるのも仕方がないと回答する者が多いことから、この出費の項は、音楽専攻生の特徴というより、むしろ相愛大生の特徴であると考えられる。

相愛大生は余暇活動として手軽でお金のかからないものを求める傾向があると考えられよう。

Ⅳ 要　　約

音楽専攻生の学園生活とその意識の概要をとらえるため、音楽、体育、国文科の学生を対象として数量化第Ⅱ類による分析を行ない前回の結果を検証した。

音楽専攻生の長時間の練習と短かい余暇時間、入学目的としての専門性の追求が認められ、前回結果を追証することができた。今回はさらに、現状保持の保守的傾向、私生活中心の生き方の特徴も指摘された。また、これらのうち、短かい余暇時間とその不満、保守的生き方などは体育科と類似することが明らかにされた。

相愛大学音楽専攻生の余暇生活の実態に関しては大阪教育大学音楽科学生あるいは他の統制群を設け検討した。以下の2点が相愛大学生の特徴として明らにされた。

① 一般学生に比べ余暇満足度は低く、サークル・クラブ活動も低調である。

② 奥行きのある余暇活動を望む余暇積極派と呼べる者が多い。しかし、お金はかけない倹約家である。

（附記）
本研究の調査実施に大阪教育大学体育学研究室の御協力と示唆を得たことを記して感謝します。

参考文献

(1) 長野孝男（1980） 女子学生の生活意識について　相愛女子大学・相愛女子短期大学研究論集　音楽学部編

(2) 長野孝男・滝　省治（1983） 女子学生の生活意識について（その2） 相愛大学・相愛女子短期大学研究論集　第30巻　音楽学部編

(3) 総理府青少年対策本部（1980） 青少年の社会参加における促進要因と阻害要因に関する調査研究（青少年問題研究調査報告書） 5頁、29頁

(4) J. デュマズディエ　中島巌訳（1976） 余暇文化へ向かって　東京創元社　19頁

(5) Yu, J.M., & Mendell, R. The development and Utility of a leisure behavior index *Research quarterly for exercise and sport* 1980, Vol. 51, No. 3, pp. 553-558.

(6) Iso-Ahola, S.E., & Allen, J.R. The dynamics of leisure motivation: the effects of outcome on leisure needs Research quarterly for exercise and sport 1982, Vol. 53, No. 2, pp. 141-149.

(7) Hunt, S.L. Work and leisure in an academic environment: relationships between selected meanings Research quarterly 1979, Vol. 50, No. 3, pp. 388-395.

(8) 林知己夫・駒澤　勉（1983） 教量化理論とデータ処理　朝倉書店　49頁、26頁

(9) 林知己夫・村山孝喜（1979） 市場調査の計画と実際　日刊工業新聞社　136頁

(10) 三宅一郎他（1977） SPSS 統計パッケージⅡ　解析編　東洋経済新報社　180頁

(11) 弓野憲一（1981） 対数一線型モデルによる質的データの解析とそのための BASIC プログラム　静岡大学教育学部研究報告（自然科学部門） 32号

(12) 吉田　昇他（1980） 現代青年の意識と行動　日本放送出版協会刊　166頁　135頁

(13) 多々納秀雄他（1982） スポーツ種目のパターン分析と関連要因の分析――大学生の事例から――　体育学研究　第26巻4号　269頁

(14) 岡田至雄（1982） レジャー社会学　世界思想社　95頁
(15) 東京都生活文化局（1983） 大都市青少年の生活・価値観に関する調査　第3回東京都青少年基本調査報告書　71、110、116頁